

# 民藝の心が生きるまち・南砺

## 南砺市民藝調査報告書（概要版）

### ■ 民藝の起源と歴史

#### ● 柳宗悦と民藝運動

柳宗悦は、1910年、学習院卒業の年に武者小路実篤、志賀直哉らと文芸雑誌『白樺』の創刊に参画し、当時の最先端の西洋美術を積極的に紹介していきます。

その後、東京帝国大学哲学科で心理学を学び、西洋の神秘主義思想に傾倒する中、朝鮮陶磁器の美しさに魅了され、無名の職人が作る民衆の日常品の美に開眼します。西洋を経て東洋を再発見した柳はさらに、木喰（もくじき）上人と呼ばれる僧侶が彫った木喰仏に惹かれ、全国を調査する中で日本各地の手仕事に出会っていきます。

1925年、そうした民衆が作った工芸品の美を伝えるために濱田庄司や河井寛次郎と共に「民藝」という新語を造り出しました。

そして、全国の同志達と共に民藝運動を展開し、1936年に日本民藝館が開設されると初代館長に就任、戦中・戦後であっても民藝運動は止まることはありませんでした。



#### ● 3つの側面：民藝品、民藝思想、民藝運動

民藝とは下記の3つが大きな要素となります。思想と具体物、実践が一体となった総合的なものと言えます。

民藝品とは民藝思想が顕現する具体物であり、民藝運動とは民藝思想から導かれる暮らしをつくる活動なのです。

#### 「物」としての民藝

- 作り手のはからいを超えて作られた日用品（下手物）にも美が宿ることを発見。
- 「民衆的工藝」当時の西洋美術や「工藝」と区別するためのアンチテーゼ

#### 「思想」としての民藝

- 自我を捨てて、自然と一体になって作られたものに「健やかな美が宿る」
- 「禅」や「茶道」など東洋の思想に通ずるもの
- 東洋思想に基づいた新しい美学

#### 「運動」としての民藝

- 作り手たちを励ます（新作工芸の奨励）
- 使い手を啓蒙する（販売店の展開）
- 雑誌「民藝」、民藝夏期学校、民藝協会全国大会etc

### ■ 南砺市と民藝

#### ● 南砺市の自然と精神風土

平野部は小矢部川と庄川の流れが形成した扇状地で、北を除く三方を屏風のような山々に囲まれています。山間部（五箇山）は飛騨高地の北端にあたる起伏の激しい地形です。雪は自然の脅威でありながら、一年中枯渇しない水をもたらしてくれる恵みでもあります。

広大な扇状地では、先人たちが大変な努力によって砂利地を開拓し、開墾した水田の近くに家を建て、担うカイニョを廻らせ、500年ほどの歳月をかけて散居村の景観を作ってきました。それを精神的に支えたのが、山岳信仰に始まるこの土地の信仰であり、特に本願寺8代・蓮如上人の布教によって、「真宗王国」と呼ばれるまでに他力信仰の盛んな地域となりました。

#### ● 南砺市と民藝の関わり

南砺と民藝の関わりを大きく開いたのは、青森県生まれの国際的板画家、棟方志功（1903年～1975年）です。棟方は柳宗悦を師と仰ぎ、民藝と深い繋がりをもつ作家でした。

棟方は昭和20年4月、空襲が激しさを増していた東京から家族そろって福光に疎開し、その後の6年8ヶ月を福光で過ごしました。そこで出会ったのは、高坂貫昭や吉田龍象といった、当時浄土真宗思想の近代化に取り組んでいたこの地の僧侶たちでした。

司馬遼太郎が、福光疎開時代の棟方のことを「他力の国に留学した」と表現しているように、自我を超え、おおいなるものにゆだねて作品を生み出す境地を目指すようになった棟方の作風が大きく変わったと言われています。

#### ● 民藝思想の形成と南砺の土徳

柳宗悦が最初に富山を訪れたのは、棟方が福光に疎開して3ヶ月後の1945年（昭和20年）7月のことでした。翌、1946年5月には、柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ、外村吉之介、棟方志功の一行が五箇山を訪問します。妙好人「赤尾の道宗」の足跡を訪ねることが目的でした。リーチが五箇山の行徳寺に集まった人々を前に、開口一番「わたしはここに立っているとみなさんの身体に浸り込んでいる土徳を感じる」と話したそうです。

厳しいながらも豊かな自然の恵みに感謝しながら、勤勉に努力しお互いを慈しむ人々と自然がともに作り出すこの土地の空気（土徳）が、柳にも大きな影響を与えます。「なぜ名もない工人の手から美が生み出されるのか」その仕組みを解き明かしたいと思っていた柳は、南砺で他力の思想とそれを実践して生きる人たちを目の当たりにし、ついに城端別院善徳寺での70日間に及ぶ逗留を経て、民藝思想の集大成「美の法門」を書き上げました。それは、仏教思想を典拠として美の掟を解き明かす「**仏教美学**」の樹立という新たな段階への出発点ともなりました。



散居村の風景



アズマダチとカイニョ



柳が「美の法門」を執筆した、城端別院内の「御広敷の間」

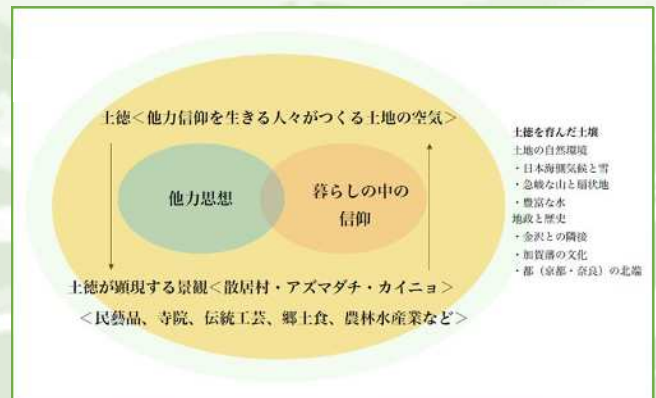
## ■南砺市の「民藝」とは？

南砺には、理論だけではなく、「民藝思想」を形成する大きな契機となった「他力思想」とそれを「他力の中に生きる人々の生活といとなみ」が、民藝同人を惹きつけ、深いところで影響を及ぼしたのだと考えられます。また自然のグラウンドルールの上に人々がいとなみを重ねることで形成されてきた文化的景観と、長く伝わってきたものの本質を見極め、より良い未来のために応用していく革新性も、民藝との結びつきを支えました。

- ・ この地に深く浸透した浄土真宗の他力思想
- ・ 信仰に生きておられる人々と南砺の自然が生み出す土地の空気＜土徳＞
- ・ 土徳が顕現している散居村・アズマダチ・カイニョといった文化景観や寺院・伝統工芸・郷土食・農林水産業などの営み
- ・ ここにあるものを慈しみながら未来を切りひらいていく姿勢

「民藝思想」を形成する大きな契機となった「他力思想」とそれを「暮らしの中で体現する人々」であり、今なおそれがこの地に息づいていることから、

**民藝の心が生きるまち・南砺**  
と表現することができます。



## ■南砺市における「民藝」の現状と課題、そして未来へ

### ●現状と課題

#### ✓ 市民の間での認知度の低さ

南砺市においては、となみ民藝協会など一部有識者は精力的に活動されていますが、行政をはじめとして大多数の市民にとって民藝関連の認識は薄いのが現状です。

#### ✓ 民藝品や民藝ゆかりの場所の活かし方

保管している民藝品の整理などに手が回らないことや、お寺などでは民藝ゆかり場所として年中公開することで感じる負担、また貴重な民藝同人ゆかりの品を外部に広報することの不安といった声もあります。

#### ✓ 昔ながらの信仰といとなみ、景観喪失の危機

南砺市では、少子高齢化問題や農業の大規模化による非農家世帯の増加など、真宗の信仰生活を支える昔ながらの生業や世帯構成が失われつつあり、さらに環境問題から始まった野焼き禁止の流れや維持管理の負担から「カイニョ（屋敷林）」を伐採する世帯が増え、核家族化の進展から大きな座敷や仏間を備えた「アズマダチ」も建て替え等により少なくなっており、散居村の特徴的な風景の消失も危惧されています。

### ●「一流の田舎」を目指す南砺市としての未来

#### ✓ 第2次南砺市総合計画の将来像「誰ひとり取り残さない誰もが笑顔で暮らし続けられるまちへ」

この解説文の中に「『南砺』に暮らす私たちが、この土地の豊かさや暮らしに感謝と誇りをもち、互いを信頼し、誰ひとり取り残さない地域社会である『一流の田舎』を目指し、次代を担う子どもたちが笑顔で暮らし続けられるまちを実現します。」とあります。「感謝と誇り」「互いを信頼」というフレーズはまさに、南砺市に昔から息づく「精神風土」を継承するものと感じられます。

#### ✓ 「SDGs 未来都市」の選定

南砺市からの提案内容には『南砺市の土徳文化を次世代に継承する取組みや支え合いによるまちづくりの取組を通して、地域資源の循環や相互補完が可能となる人材育成プログラムや住民参加による自治組織形成を促進するとともに、これらを基金運営等により支えることで、SDGs及び「南砺版エコビレッジ事業」をさらに進化させ「一流の田舎」を実現する』としています。

本調査報告書をきっかけとして、まずは南砺市民に市独自の「民藝」に対する認識を高め、南砺市の「民藝」を具現化しつつ、全国・世界からも認知されることは、南砺市が目指す将来像「一流の田舎」の姿に合致します。

#### 【お問合せ】

南砺市ブランド戦略部文化・世界遺産課 世界遺産・文化財係  
〒939-1626 富山県南砺市荒木1550 南砺市役所別館2階  
tel : 0763-23-2014 fax : 0763-52-6349 e-mail : bunkaka@city.nanto.lg.jp

